特116
705

嵐山
巡幸
卷絹
花月
鐘馗

三

始

特116
705

嵐山　概説　外三卷ノ一

亀山ノ院、吉野山なる千本ノ櫻をめで給ひけるが、道遠くして屢行幸もなり難ければとてかの花の種を取り、嵐山に植ゑさせ給ひたれば、此春の花の様や如何にと勅使を遣し給ふ。勅使嵐山に到れば老人夫婦あり、此山の櫻は吉野山の櫻なれば、をりくは木守勝手の二神影向なる神木なりなど語りて吉野の方へ飛去りぬ。やゝありて此二神嵐山に現れ、尚吉野の鎮守藏王權現の來現あり、花に戯れ梢に翔り、久しき春の様を見せて歸りけり。

此曲総ジテ晴ヤカニ謡フベシ

小書　白頭

役	附	装束附
ワキ	勅使	大臣烏帽子　赤上頭巾　着附厚板　袷狩衣　白大口　紋附腰帯　扇
ワキツレ二人	臣下	大臣烏帽子　紋附腰帯　萠黄上頭巾　着附厚板　赤袷狩衣　白大口　扇
ツレ	花守ノ姥	面姥　襟萠黄　姥髪　無色髪帯　着附摺箔　浅黄縫水衣　無色唐織　笠
前シテ	花守ノ翁	面小牛尉　狩髪　着附小格子厚板　茶絎水衣　白大口　襟浅黄裃ノ類　狩扇　笠
後ツレ	子守明神	面邯鄲男　透冠　黒垂　金地鉢巻　着附厚板　單狩衣　白大口　透紋腰帯　襟萠黄　神扇　撫板
後ツレ	勝手明神	面建面　黒垂　髪　髪帯　天冠　着附摺箔　紫長絹　緋大口（白大口ニテモ）　襟赤　丸紅扇　櫻ノ枝　透紋腰帯
後シテ	蔵王権現	面大飛出　赤地半切　唐冠　赤頭　色鉢巻　着附段厚板　袷狩衣　襟　襟色ノ類　神扇　透紋腰帯

季	所	曲柄	能
三月	山城國葛野郡嵐山	誓願寺順	脇能（初番目）（神祇物）
			四級

ワキ勅使
ワキツレ二人
次オ上ツヨク
拍子二合

ワキ詞　確カリ

嵐山

花の種とりし。吉野の花の種とりし。嵐山に急がん

そもそもこれは當今に仕へ奉る臣下なりさてもまた和州吉野の子本にあれども遠方十里の外なれば見

禪鳳元安作

の序幸かなひ給はずさるによりて千本の桜と嵐山に移しおかれて山間この春の花を見て楽れたる宣旨と蒙り。只今嵐山へと急ぎ都にのぼりにも嵐の山桜。千本の種つられぞとて。寿ねて今ぞ三吉野の白の雲かと

道行上三人

詠めける。その歌人のなごりぞと。よそめにもなれば有ながらもの眺め妙なる。景色かな眺めの妙ある景色かな

半内 気ヲカヘサラリ

急ぎは狂にそれつたやや嵐山に急きて。心静に狂を眺めうずるにて

真ノ一声 シテ射二人上 柏子三合ハヤ

柳ヲ用カニ

花守の。住むや嵐の山桜。雲も上なき。梢かな

ツヨ三ノ句サラリ

千本に咲ける種あれ

シテサシ上ヲカヘ

やまも久しき。氣色かな

これはこの嵐山の花を守る。夫婦の者にて候。それ遠方十里の外あれば。花見の御幸あきまして。名にあふ吉野の山櫻。千本の花の種をうゑて。この嵐山に植置かれ。後の世までの例とかや。それそれ

君の惠かな

げに頼もしや御歌山治まる。御代の春。雲の空。さも妙あれやあれや九重の。さも妙

重の。内外に通ふ花車。轅も西にめぐる日の影ゆく雲の嵐山。子無

瀬に落つる白波も。散るかと見ゆる花の籠。盛久しき。氣色かな盛

中ニ（閑ナル心）久しき氣色かな。（羽）不思議やおそれなる老人を見てれば花に向ひ渇仰の氣色見えたり。たゞとはいかなる人やらん（シテ）さんぶとれば嵐山の花守にてゝ候。嵐山の千本の桜ぞ。皆非木にて候。殊に向ひ渇仰せしは（ワキカ）そも嵐山の千本の桜の。非木

たるべき謂はいかに（シテ）げに因果富の御理。なにおふ吉野の千本の桜を。移しおかれし（カル中ホノヘテ）その故に。人こそ知らねをりをりの。木守勝手の神ともに。この花に歌向あるものを

（羽カル上）げにやさしくもこそ厭ふ憂きなの嵐山。取り分き花の名所とは。

何ゝて宮め、直きけるぞ（シテ 柳ヘテ問カニ）それたそ
あ屋も神慮あれ。花に花の奇
特をも。顕きんとの御惠（オンメグミシテ不思ハカツテ）げに頼も
しや声歌山。靡き治まる三吉野の。
神風あらばあのづから。なてそ嵐
のなりとも（下歌中サリ）花のよも散らじ。
風なも勝手木守りとて。夫婦の弥（柏子三合）
はわれそかし。音たかや嵐山。人に
（上歌中朗カニ）たかや嵐山。人に
（上歌中朗カニ）あ知らせ給ひそ。蛙の岩屋の
松風。（上歌）蛙の岩屋の松風は。實相
の花盛。開くる法の聲立てゝ今の
嵐の山。掬（上中上）菜摘の門の水清く。芳
（上）菜摘の門の水清く。芳
しの月の澄める世にて。五濁の濁あ
りとても。流は大堰川その水上の

○獨吟
○切定雜子

よも盡きじ。いざ花を守らう
よいさいざ花を守らうよ。雲の風の
空に滿ちて。雲の風は空に滿ちて。
庭前の木を切るとも外風にて
吹きかへさべき想の雲も晴れぬべし。
千本の山櫻長閑けき嵐の山風
は。吹くとも枝の鳴らきじ。この日も

すでに昇降の夜の間を待たせ
給ふべし。的日も三吉野の山櫻立
ちくる雲にうち寄りて。夕陽踏る
西山や。南の方に行きけり。南の
方に行きにけり。中人来序末社間
○小謡 下り羽 ツレ出 上意ツリ
○三吉野の。三吉野の。千本の花の
種植ゑて。嵐山あらたなる外遊びぞ

後ノレ子寺勝手入上ハ朗カニ

めでたきこの神遊びぞめでたき

いろいろのいろいろの花そそまれ

白雪の末守勝手の惠あれや松

の色　ウイツレ二人中ヘ朗カニ

青根が峯そそぎて青根が峯

そびえたる小倉山も見えたり　向ひの嵯

峨の風下の大堰川の岩根に波かゝる

亀山も見えたり　上流ニ流ル　萬代と萬代と

雛せ雛せ神遊び　千早ぶる　天安舞　上手辺

神樂の鼓聲　登みて　神樂の鼓聲

登みて　紅の袖の袂をひるがへし　翻す

舞樂の秘曲も度重なりて　感應

肝に銘ずるとりからも不思議や南の

方より吹きくる風の異香薫じ

て瑞雲たなびき　金色の光輝き

○仕舞

旦苗シテ出ヤ上ヤ辺ヤ確カリ

後シテ藏王權現

わたるは。藏王權現の示現かや

上強クサラリ

和光利物の御姿。和光利物の御姿

後シテ藏王權現

われ本覺の。都を出で。分段同居の

塵に交はり

地サラリ

金胎兩部の一足と

シテ確カリ

ひつさげ

悪業の衆生の苦患を

地サラリ

助け

シテ確カリ

きてゝ虛空に手をあげ

てゝ

忽ち苦海の煩惱を拂ひ

○祝言小謡

月サラリ

悪魔降伏の青蓮のまなゝこりて。

光明を放つて。國土を照し。衆生を

守る。折々を顯し。本尊勝手。藏王

權現同體異名の姿を見せて。

おのおの嵐の山に攀ぢのぼり。

花に戯れ梢にかけつて。さまざまの

てらも。人王の峯の光も輝く千本

の梅。花も輝く千本の梅の。宮ゆ
く春てそ。久しけれ。

正尊 概説 外三巻ノ二

土佐坊正尊頼朝の命にて義經を討んと都に上る。辨慶之を看破して義經の館に伴ひ來り、上洛の謂を問ふ。正尊さあらぬ體にて熊野糸詣の序なりと偽る。義經受けずして密計を訐けば、正尊當座の席を遁れんと自筆に起請文を認め偽無しと誓ふ。義經等素より偽證とは知りながらも其器用に感じ酒を呼べば、静も起ちて一さし舞ふ。かくて正尊退出後偵察せしめしに、土佐方にては今にも打寄せ來らん氣色なりとのことに、義經出で待受くる程も無く正尊駒静々と打寄せ來り、戰を始めしが、正尊は辨慶と組みて捕はれ、義經方の勝となりて引上げけり。

此曲凡テ強ミヲ持ナテ謡フヲ宜シトス

小書　起請文

役別	装束附
ツレ　源義経	直面　風折烏帽子　着附厚板　長絹　白大口　縫紋腰帯　襟菊黄　扇　太刀（子方持チ出ル）
子方　静御前	鬘　鬘帯　着附摺箔　色入唐織、浮折　緋大口　腰帯　襟赤　扇　太刀
ツレ　江田源三熊井太郎	侍烏帽子　着附厚板　扇　後ニ白鉢巻　太刀　袴直垂　白大口　腰帯　小刀
ワキ　武蔵坊弁慶	兜巾　篠懸　着附厚板　縞水衣　白大口　側次　腰帯　小刀　襟襟色　扇　菊高珠数　又角帽子ヲ沙門ニ着テモ　後ニ長刀
前シテ　土佐坊正尊	直面　角帽子（沙門ニ着）　着附厚板　水衣　白大口　腰帯　小刀　襟襟色　扇
後シテ　同	直面　袈裟頭巾　法被　半切　紋附腰帯　小刀　襟襟色　長刀
後ツレ　姉和光景	白鉢巻　着附厚板　白大口　側次　腰帯　太刀
立衆　（シテ方）人数定マリナシ	白鉢巻　着附厚板　白大口　腰帯　太刀

季	月	曲柄	番目
	九月		四番五番目
所	都　京	誓古順	三級
	西路小油東川堀		

正尊

作者不詳

弁慶問手負ク

それは西塔の武蔵坊、辨慶にてゝ候。

さても我が君判官殿は。鎌倉殿

より大名十人付けナされてゝ候へども。

内々御中不和になり強みにより。心を

合せて一人づゝ皆下りをして。作。

さても去年の冬義仲を

追討せ〜よりこの方。度々平家を攻め落し。その主亡ぼし果て〜ゆ。天下を鎮め四海を澄ます勧賞行なるべき所に。波邊にて梶原が逆櫓の意見を家引し給ひざりし。遺恨によりて我が君を傾奉り。兄弟の御中不和にぞ給ひてゆ。鎌倉より土佐正尊を差す。明日都へ上りてゆかれ。これは我が君を狙ひ申さんためと聞しめされ。急ぎ召し連れて来られこの使にて程に。ゆ〜土佐が振宿へと急ぎゆいかよ。集内十しゆ判官殿より御使に武蔵かまでゆ。正尊はこの屋のうちに

御入りゐか（シテ正尊ヲ）武蔵殿かやあら珍らし
やまづ此方へ御入りゐへ（ワキウケテ）承りゐまづ
以つて御上り（オンノボ）めでたう候。それの君
よりの御使（ツカヒ）にて（ムシャウラク）上洛の由聞し
めし及ばれ。何とて（ゴ）同候（コウ）ゐたぬぞ。
鎌倉殿の御意（ギヨイ）も聞しめされたく
候間。急いで御事（オンマサ）まりあれとの御事

にてゐ（シテ閑ヲ強ク）さん候。宿所（シユクヨ）の子細（シサイ）ゐ。
態野（クマノ）事詰（サンケイ）の為にふと罷（マカ）り上り
てゐ。昨日（サクジツ）京（キヤウ）を出（イ）でゐへども。路次（ロジ）より
違例（イレイ）仕り散々（サン）の事にてゐ候。
今まで遅（オツ）なりて（ワキウケテ）委細承り
ゐ。作はさる事なれども。只今御
供（トモ）せとの御事にてゐ（シテ運ンデ）畏（カシコ）まって

はゝ上へども。今おし養生を加へ必ず
何候やしれべく　いやいや時も
早く國の御事とゞ　思しめされたく
思しめせば。たゞたゞ御供ヤさんと
○小謡　シテカル上　柏子ニ合ハズ　ツヨク　是非を云せぬ武藏殿に　キヤ
剛なるシテ　去佐坊も　上ゝ月　柏子ニ合　君ほあらず
猫毎の。君にのあらず猫毎のよれ

ばなる事もいさ。あらましごとも
使に。なるともよしや露の身の消
えてなのみを。殊さぞや消えて名の
みを殊さぞや。　早ウケテサラリ　いかに申し上ゝ土佐
正忠を召し連れて　参りてゝ
ツレ判官サラリ　ゝ方へとやしゝへ　早ウケテ　是つてゝ。であたへ
まられゝへ　判官サラリ　いかに土佐坊珍らしや。

さて何の為にとりてあるぞ。鎌倉殿
より御文はなきか。きんぢさしたる
御事も御座あるらん間。御文は来ら
ずい。詞ふ申せとい。ひしは。都に別の
子細なくい事。偏に御渡りいなと
思しめし。作。かまへて能く守護させ
給へとこそ御使ひつれ。判官カッテサラリ よもさの
あらじ。義経付たてまつりたる御使と
こそ覚えたれ。ワキカウテ確カリ 彼の如く。大名
どもをさしよせられいつ。字治瀬田
の橋をも引き。都鄙の騒ぎとし
なつてあり。かりあんと思しめし。
佐坊上つて拘束するやうにてだにか
つて討ちまゐせとこそ作せ付けられいひ

つらあ。手強ク和僧においてハこの法師。手
あみの強を見すべきあり。あら勿體
あやたゝひ人の僉言により。君てそ
作せ出さるゝ。すがに武略の
武藏殿。さハあるまじきと申され
てゝそ。法兄弟の御中にもの云ひさ
があるべき事あるまじけれ。まづ靜
まつて事のわけと。委しく聞き給へ
武藏坊。それハ法師にてハべども。何に
よつて兵ハ今さる御事のハべき。郎
宿所の事の仕向。熊野と申ハの為に
罪りとりてハ。判官梶原が僉議により。
義經を錦會へも入れられず。道より
追ひ返されし事ハいかよ。その事ハ

いかゞはせんやらん。身においては全く後
悔あらざる起請文に書き表し。
只今御目に懸くべしと（上ニ有ル円サヲリメ）当座の
席を通れんと（カ上ニ元ヲカヘ 柏子三合ハズ）当座の席を通れ
んと伝へ聞うるゝ者にて。自筆にて
これを書きつけ雑慶にてその渡し
けれ（シテ中ニ起請文）敬つて白す起請文の事。

上は梵天帝釈四大天王閻魔法王五
道の冥官泰山府君下界の地祇。
伊勢天照太神を始め奉り伊豆箱
根富士浅間熊野三所金峯山王
城の鎮守稲荷祇園賀茂貴船八幡
三所松尾平野總じて一地日本国の
大小の神祇冥道請じ奉るかしこまる

弥にて氏の祢。全く正る付手で罪、
よる事あり。その事偽これあらば。
その指を言の由罰を當り来世へ阿
鼻に墮罪せられん去なり仍て。
起請文かくのごとし文治元年九月日。
正尊と憤みよりけたるへ。身の毛も
よだちて書いたりけり。固より虚

言と思へども。文を揮うて書いたる。
器用を感じ思じめ。御盃を下さ
るるとりふて御前に。義の孫師が女に。
静といへる白拍子。琴を撥を謡ひつ。
お酌に立ちて。紅かづらかる姿ぞ
たぐひなき。弟の猶

破掛中ノ舞三段

君が代は。幾代に一度。みるちりの

子方静上

（上ノ句）白雲かくるゝとなるまで。（頭ノ句）ゆとなる
まで。（静中）変らぬ契り
を頼む中の。（上ノ頭ノ句）変らぬ契りを頼む中
の。隔てぬ心の外ぞ知らんよくよく申
せと静に諫められ。佐方殿前を罷
り帰れば。思もよらぬ御寝所へ入らせ給へ
べおのおの退出申しけり（中入）（狂言）

（口ノ句）いかにやしらしよげの。只今土佐が宿所
を見せて遣つ。作所に幕の内にか
矢を負ひ弓を張り。長ぎも皆武具
を。只今打立つ。顔色見えて変
に物語の。顔色見えぬ由申し作
（判官）固より覚語の前あれば。何程の
事のあるべきぞと。（口ノ句）（雑カリ）（拍子合ノ句）そのまやかで

御座と立ち（静）寄りの著背長まいらする（拍子三合）義経とれとなされつ（段々進ム）義経とれと名されつ御佩刀を取て
しづしづと中門の廊に出で給ひ。
門を開かせ諸共よ。寄せ来る勢を
待ち給ふ寄せ来る勢を待ち給ふ（シテ立衆一声上ル拍子三合ハズ）（手強ク）（ヒ物着）
白浪とよそてやゆかんわたづみの
深き心はあるものを（後シテ力手強ク）その時に尊
勢しづしづと打ち寄せて大音上げて
名のるやうそもそもこれは鎌倉殿の
御使土佐正尊しかの郎ヶ事なり九郎
大夫判官殿の付手の大将たまはつ
たり疾う疾う御腹召されと大音（カヽル上ル強ク）
上げてぞ呼ばはりける（拍子三合）味方の勢

つてれを見て。味方の勢はそれを見て。あの土佐坊と討ち取らんとやれもわれもと進む中にて。江田の源三熊井太郎。雑慶と先として。門外に切つて出づれば寄せての兵海り、あひ。喚めき叫んで。雑慶表に進みいかに土佐坊確に聞

けさても書きつる虚起請の罰を忽ち蒙べ。いざ一太刀と呼ばれべ大将討たせてかあはずと。なむ打物ひつさげて。雑慶と目懸けて懸りけれべ天晴器量の人體かな。さて世たそと尋ぬれべ姉和カウテサラリものその物にあらねども。尊が門に名を得たる。

カル上 元ヲカヘ
拍子三合バム

陸奥の国の住人に。婦和の平次光景
なりと。大音上げてぞ名のりける

甲元ヲカヘ

上内手強ク

げにゆゝしくもみるものかなとて
彼の土佐が郎等。われに不足のたゝか
カル上ニ

れども。志とゞば報ぜんと

拍子三合

上内

長刀やゞかて
ウサラリ 段々進ム心

取り直し。長刀やゞかて取り直し。無勢
赤切

元ヲカヘ

や彼。手にかけんとて。やゝ長刀を打ち

はらひ。受け流せばよろ歩めちやう
と打てぞ。つたと合せ。重ねて打つた。
元ヲカヘ

打ちまれて。行かのたまらん唐竹割
元ヲカヘ

に二つになつてぞ失せにける。
カル上元ヲカヘサラリ

上内

正尊
これを見るよりも。正尊これと見るよ
赤返

りも。字使の郎等数輩討たせて。
今の適ぞと馬より立ち乱れ入る

と。義経打拍子直て給ひ。すきまを
あらせず鞭ひ給へば、諸共に
切り拂ひ切り拂ふ。ふる適はずと引き
立ちけると。辨慶追つめ鞭ひけるが
押し並べむずと組みえいやと投げ伏
せ大勢取りてめ縄打ち勉けて悦び
勇み。囚人を引かせ。門の内にぞ入り給ふ

巻絹　概説　外三巻ノ三

時の帝霊夢を蒙り給ひ、國々より千疋の巻絹を熊野権現に納めし
め給ひしに、都よりの分延著せしかば、官人怒りて其持夫を縛め
けり。折しも一人の女神子出で來り、其男は昨日音無の天神に立寄り、
一首を詠みて我に手向けし者なり、縄を解くべしと言ふ。官人試に歌の
上の句を男に問ふに、神子下の句を継ぎけるにぞ、今は疑の縄も解け
ば、神子は和歌の徳を説き、やがて祝詞を上げ、神樂を奏したる後、
神霊天に上らせ給ひて神子は本性となりけり。

此曲清クスラリト伸ビヤカニ謡フヲ宜シトス
小書　替装束

役別		装束	附
ワキ	大臣	風折烏帽子　着附厚板　長絹又ハ單狩衣　白大口 腰帯　男扇	
ツレ	男	直面　着附無地熨斗目　摺素袍　白大口　紋附腰帯 襟浅黄　扇　巻絹	
シテ	神子	面増髪　前折烏帽子　鬘　鬘帯　着附摺箔 白水衣　緋大口　縫入腰帯　襟浅黄　木綿襷 黒骨妻紅扇　幣	

季所		曲柄	番目
季	十二月	曲柄	四番目（能脇）（第三番目）
所	紀伊國東牟婁郡熊野本宮	誓願順	三級

巻絹

観阿彌清次作

ワキ大臣詞カニ

そもそもこれは當今に仕へなる臣下なりさても我が君あらたなる霊夢を蒙り給ひ千里の巻絹と三熊野に納めよとの宣旨にて候ぜ。國々より巻絹を集めさる間都より参るべき巻絹遅おつり候。参りてはやつぐ神

前に納めだやしとねじ作
ソレ男サラリ次才上
今と始の旅衣。今と始の旅衣紀の
路にいざや急がん。都のまぶりあり
ヨワク柏チニ合
そても。旅の心の安かるべきか。殊更それ
王土の命。重荷とかくる南の国。角くだ
て遠き千里の濱邊。ゆの苦路のさが
しきを。いつかは都えん。旅の道休らふ

間も無き。心かなう上ヲ中ヤ。てれくても君の
恵によも。洩れじ。麻衣よい。紀の関
都えて遠ざと。紀の関越えて遠ざ
と。あとあとそこも分けつ
行けどそれぞこの。今ぞ始めて三熊
野の浦。あに早くぞ。ぶきてけり。浦あよ
早くぶきてけり。ぶぎは狩に。三熊

野に見きていまづづまづ音無の天神
へまらだやと思ひいや。心持し気ヲカヘ冬梅の白の
匂えいづくにかいらん。げに気ヲカヘれなる
梅にて候。この梅と見て行とあく思
ひ連ねて南無天満天神。心中の願
を叶へて給はりいかべと、内中サラリ祈りの
言の葉と。心の中に手向つ。踏ぎの葉り

てまづ思に仕へ申さん。ツレ内サラリいかに案内
申しい。都より巻絹と持ちて参り
ていワキカツテ行て遅かりたるぞ。その為
に日数を定め。まるなかに。此一人おろ
かある。上ヲ月サラリ その分の科のがれと。その
分の科のがれと。やかて縛めあら
けなき苦みと。せて目のあたり罪の

報いと。知らせけり罪の報いと知らせけ
シテ神ヲ問 閑カニ朗カニ伸ビリト
呼掛 あうなうその下人をば行て縛め
給ふぞ。その者ハきのふ音無の天神にて。
一首の歌をよみわれて手向し去られべ。
細工あれべ神虚ぶり涼きに三熱の。
苦みを免るそれのみか人倫心あり。
問カシテ その縄解けとて解けや手櫛の
乱れ髪。解けや手櫛の乱れ髪の。
神ハ受けずや御注連の縄の引き
立て解かんとて手を入れべ。心強く
も。岩代の松の結び。かの結びの解け
なや。呼問サラリ これはさて行と申したる御事
にて候ぞ シテ閑カニ朗カニ その者ハ音無の天神
にて。一首の歌を詠みわれて手向し

去なれば、ごとく縄と解き給へ
これは不思議なる事と思り作もの
かな。かほど賜しき者の歌など詠
むべき事思ひもよらずいかさま
にも疑つき神慮かしなど作よ
ありほも神慮と偽るやさあらば彼
去きのみわれに手向し言の葉の上の

白とかれに問ひの弦へわれ下の白とべ
續くべ　こは上はさかくやすたなど
ずいかに海眞に歌と詠みたらべそのし
上の白とやすべし　今は保りやすた
及ばず彼の音無の山陰にさも美し
きを梅の色殊ありしと仕とあく。
心も深みてかくばかり音妄にかつ

咲き初むる梅の花、白たぎりせべ
誰か知るべきと。詠みしの疑ひあきも
のと、上句にかくれに二句に直捨方便の招雲
又ぬ非虚ぞぐある故にかくべかり。
納受あれだ今はやはや疑を晴せ給へ
で歌人と。宥させ給ふべし。また
心中に隠し歌も。神の通力と知

○サシ曲独吟
○切迫難子

るあれだげに疑ひのあだ心打ち解け
ての縄をとくゆるし給へや
それ神は人の敬ふによつて威をま
し人は非の加護によりて。それだ
楽む世に逢ふ事。それ総持の義
によりて言葉すくあうして理を
含み三雑耳絶えて寂然閑静の

○仕舞（クセ下ノ中ニ拍子三合）

床の上に居て眠遥かに眼を去る而
れば、ようて、本有の霊光忽ちに
照し自性の月、漸く雲とさまれり。
一首と詠ずれば、ようづの悪会を
遠ざかり天を得べ清く地を得
れば安しあらかじめ唯有一寶相
唯一金剛とは説かずや　きれば天

竺の婆羅門僧正、行基菩薩の
序手を取り、霊山の釈迦の席もと
に契りて真如打ちせず逢ひ見
つと詠ずれば法返歌（上大）して伽毘羅
衛に契りし事のかひありて、文
殊の顔を拝むありと互に佛
佛と顕すも和歌の徳にあらずや

又神の出雲八重垣作りそぎの寒き
世のためいたづらも傳へ聞きつべし。
神の志めゆふ系掛の風の解けぞ
思ふ。
さあらば祝詞を唱へ
せられひて。神をよげ申されひ
謹上再拜ぞもろも當山の法性
國の巽金剛山の霊光。この地よ

発んで霊地となり、今の大峯これ
なり。
さればこそ獄の金剛界の曼
陀羅
華藏世界。熊野の胎藏
界
宮巖浄土。有難や
神樂
不思議や祝詞の神
謙や祝詞の神
たまる。発仏と出だして。神がたりする

○仕舞

こそ。恐ろしけれ。（シテ中間カニイロエ）陸奥殿の。阿弥陀如来。（シテ中間カニイ）（地上サリメニ）中に。（シテ中間カニイ）五逆と。（シテ中間カニイ）十悪と。（地上サリメニ）道すき。（シテ中間カニイ）嫌む。（地上サリメニ）中の街前の。（シテ朝カニ）薬師如来。（地上サリメニ）薬とあつて。（シテ朝カニ）二世を。（地上サリメニ）助く。（シテ朝カニ）二方文殊。（シテ朝カニ）二世の覚母。（地上サリメニ）たり。（地上サリメニ）十萬善賢。（シテ朝カニ）満山護法。（地上サリメニ）数々の。（地上サリメニ）神々。（地上サリメニ）彼の。（地上サリメニ）現よ。（地上サリメニ）つくも。（地上サリメニ）髪の。（地上サリメニ）（進ンデサラリヨ）街帯も。（地上サリメニ）乱れて。（地上サリメニ）空に。（地上サリメニ）花ぶ鳥の。（地上サリメニ）翔り。（地上サリメニ）翔りて。（地上サリメニ）地に。（地上サリメニ）躍り。（地上サリメニ）珠数を。（地上サリメニ）揉み。（地上サリメニ）袖を。（地上サリメニ）振り。（地上サリメニ）拳。（地上サリメニ）足。（地上サリメニ）下。（地上サリメニ）足の。（地上サリメニ）舞の。（地上サリメニ）手を。（地上サリメニ）つくし。（地上サリメニ）たれまで。（地上サリメニ）ありや。（地上サリメニ）弥。（地上サリメニ）ありがら。（地上サリメニ）せ。（地上サリメニ）給ふ。（地上サリメニ）と。（地上サリメニ）云ひ。（地上サリメニ）捨つる。（地上サリメニ）聲。（地上サリメニ）のうちより。（地上サリメニ）狂ひ。（地上サリメニ）覺めて。（地上サリメニ）又。（地上サリメニ）本性にぞ。（地上サリメニ）なりてける。

花月　概説　外三巻ノ四

筑紫彦山の麓に住いする左衛門といふ者、一子を持てるが、七つの年に何處ともなく失ひたるより出家して都に上り、清水寺に參りて花をながめゐたる處に花月といへる少年來り、歌をうたひ、戯れ狂ひて、此寺の謂れなど語りぬ。僧よく〳〵視れば我が子に瓜二つなるより、尋ぬれば實にも違はず。花月は七歳の時天狗にさらはれし事ども語り、喜びの餘り羯鼓を打ち、共に修行に向ひけり。

此曲サラリト粘ラヌ様ニ謡フベシ
小書 替ノ形

役別	装束附
ワキ	僧	角帽子 着附無地厨子目 水衣 腰帯 扇 珠数
シテ	花月	面喝喰 喝喰髪 後折烏帽子 着附平摩板 水衣 白大口 縫紋腰帯 後ニ鞨鼓 潔浅黄 扇 弓矢
俳	男	

季	月 二	曲柄	四番目
所	京都洛東清水寺	誓古順	二番目
			三級

花月

世阿彌元清作

ワキ僧上次第 柏ヲニ合ヨワク 風に任する浮き雲の風に任する浮き雲のとまりはいづくなるらん

ワキ詞 これは筑紫彦山の麓に住ひする僧にてはべるわれ俗にてはべし時子と一人もちてはべりしが七歳と申しし春の頃いづくともなく失ひてはべる程に。これを

出離の縁と思ひ。かゆうの道となり
て諸国を修行仕り侍る。道行上人
の方をと知れず。赤切生れぬさきの身を知
れず。懈むべき親もなし。親のあれ
べ我が為に。心をとどめるもあり。赤千里
を行くも遠からず。野に飢へ山に
とまる身のそれぞ真のすみかなる
それぞ真のすみかなる。内サラリ急ぎ出る狂
にそれはもや花の都に生まれて作
まづ取り及びたる清水に参り。花
をも眺めぞやと思ひ。狂言宮あて
今日は清水へ御参りあるべき事にある
まづ〳〵御供申し侍る人を召せ
やし作べ〳〵。シテ花月朝カニ
そもそもそれは花月

と申す去あり。或人、我がゐを書ねし
に答へて曰く。月は常住にていふに及ず
すきて、わの字はとゝ問へば。春は花夏は
成秋は果冬は火。因果の果をば
未後まで。目のたゝぬ為に疎すとゝ
ば。人これを聞いて。日上きそは未無の
香象なりとて。天下に隠れもなき

若月とわれをや。すなり　甲　狂言　何ぞ
今日は遅く御出でゐぞ　シテ　きんば
今までは雲居寺にゐひ。かゐに
心を引く弓の。末の遊びの友達と。
中違はづとて。果たり　狂言　さらば
いつものぬくを敷て御遊び
ゆへ　シテ　中　用カニ柳ヘメニ　弟　方より。今の世までも

絶えぬものゝ。高といへるくせもの。
げに意のくせもの。くせものかな。
分はさらさらさらさらさらさらた
意てう寝られね。（狂言）あれ法螺ゆへ
鶯が花と敷しゐよ。げにげよ
鶯が花と敷しゐよ。柔射て落し
いさん（狂言）急いで遊び作へ。（シテ朗カニ）鶯の

花踏み散す。細脛と。大薙刀もあ
らばこそ。花月が身に敵の無ければ。
太刀刀は持たぬ。そらの的射んがためよ
かゝる落花狼藉の。小鳥とも。射て
落さんがためぞかし。異國の養由。
百歩に柳の葉をたれ。百に百矢を
射るに外さず。われ又花の梢の

（弓上段）（柏子長合）○それの柳それの柳に揺れ。それは雁がねてれ。それも養由それの弓名。てそかたるもの。弓に隅てつよもあらじいでものんせん。いでものんせん。腹いたる足駄を踏ん

（独吟）

脱いで大口のそばを高く取り狩衣の袖をとうつ肩ぬいで。弓の木陰に狙ひ寄つて。ぴきひやうと射だやつ思へども佛の戒め給ふ殺生戒をば破るまじ。

（狂言）

△言語道断面白き事を作せられぬ。また人の出所望にてゝ。當寺のいはれを曲舞に

作りて御謡ひゐ由を聞しめして。
一節御謡ひゐくさの出前望てゐ。
シテ謡サラリ易き事謡うて聞かせ申さう
○サシ曲独吟
○行逢難子（具時ハシテワキ掛合ヌク）
ぞるにてゐ（サシ上サラリ 地ニ会ベツヨク）れだにや大悲の悲
の表の花（明前ヲ受）十悪の里に香しく。三十
クセ 地ニ合 地ニ聞ル心 地ニコトヒラ
三身の秋の月。五濁の水に影清
○仕舞 地ニ聞ニ更ヒラ付ケト
そもそもこの寺の坂の上の田村丸。

大同二年の表の頃、草創ありしこの
方。今も音羽山。嶺の下枝の滴りて。
響くもなき清水の流と汲か
ぬまぎらん。或時この龍の水五色
に見えて落ちければ。それを怪め
山に入りそのを水上を尋ぬるに。
ぞ名せんの岩の洞の。水の流に

堀れて、名は青柳、の枝ち木あり。
その木より光さし、異香四方へ薫ず
れば、さて（シテ上、明カニ）の紙子を肩にかけ、楊柳観
音の御所変にてまいりますが、
皆人手を合せ。あなもその亭主と
知らせてたべと申せば。枝ち木の
柳は緑をかし。揚にあらぬ老木ま

で、皆白妙よ花咲きけりぞ、
うち手手の拍子よ。枯れたる木も。
花咲くと今のあまでも申すなり。
あらぬ思議やそれなる花月をよく
よくみれば。某が俗よて先ひしま
にてはいかにぞ告つて逢たぐやと
思ひいかよ花月に申すべき事の

仕事にてゐぞ　わきて御分はいづくの人
にてわたり侍ぞ　して　これは筑紫の者
みてゐ　わきかつて　さて仕なかやうよ法國と
御廻りゐぞ　しテ　われ七つの年こなよ
登りゐひ　かご天狗に取られてかやう
に諸國を廻り侍　わきかつて　さては疑ふ所
もあり。それてそなの左衛門よ見

忘れてあるか　狂言　あうなう御僧は
仕事を作せられゐぞ　わきうて　きんびこの
花月は某が俗みて失ひ子にてゐ
羽よ。さてかやうに申しゐ　狂言　げにと
御ゆしゆべ成と二つよ割たるやう
みてゐこの上はいつものぬく八撥を
御打ちゐひてう　ちつれだつて故郷

○仕舞

へ御帰りゆへ□物着（シテサラリ）きてもわれ能業
高砂より登り（ボ）七つの年、天狗よ
（月ナラリ）「（カ九上カツチ）（拍子合ヨワク）」思ひやるこそ
「さられて行きし山々と。思ひやるこそ
悲しけれ（鶴亀 上 拍子三合）「（中間カ三段々運ビヲツケ）さられて行きし山々と。
思ひやるこそ悲しけれ。まづ能業
よ高砂の山。深き思ひと西王寺。鬱波
には松山降り積む雪の白髪。さて

伯耆よりは大山。さて伯耆よりは大山。
丹後丹波の境なる鬼が城と。聞き
しは天狗よりも恐ろしやさて（上 切）京
西きの山々さて京近き山々。愛宕の
山の太郎坊。比良の峯の次郎坊。
名高き比叡の大山。獄よ。少し心のす
みてそ。門の横川の流あれ。日頃の

よそにのみ見てや止みなんと眺めよ。葛城や高間の山の上大峯釈迦の嶽。富士の高嶺よ有がりつ。雲よ起き伏す時もあり。かやうに狂ひめぐりて。心乱るるきさらぎ、一地さらさらさらさらとすつての謡ひ舞うての数へ歌々嶺々里々をめぐりめぐりて

あの僧よ。逢ひたなる嬉しさよ。今よりてのきさらぎと捨てきぬ。あれある御僧よ。つれ来らせて仏道つれしまらせて仏道の修行よ出づるぞ嬉しかりける。

鍾馗概説　外三卷ノ五

唐土終南山の麓に住める人都に赴かんと行程を急ぐ處に、後より呼止むるものあり、名を問へば鍾馗の靈なりと答へ、昔進士の試驗に及第せざりし怨めしさに、御階の柱に首を打附け死したるが、其時の帝の志に感じ、惡鬼を亡し國土を守らんとの誓を立てたり、君都に到らば帝に此由奏し給はれと請ひ、遂に鍾馗の本體を現じ、鬼神を退治する處など目のあたりに見せて歸りけり。

此曲前後トモ強クサラリト謠フベシ
小書　黒頭

役別		
ワキ	旅人	着附厚板　側次　白大口　腰帯　扇
前シテ	鍾馗	面三日月　黒頭　着附無地熨斗目　水衣　腰帯　襟崩黄　扇
後シテ	鍾馗	面小癋見　赤頭　唐冠　着附厚板　半切　袷狩衣　腰帯　襟紐　剣

季	九月	曲柄	五番目能	畧脇
所	唐土	誓吉順	四級	

鍾馗

禪竹氏信作

ワキ旅人詞　閑カニ

これは唐土終南山の麓に住ひする者にてはべるもわれ奏聞ヤすべき事の仔細候間今帝都に赴きはべる

道行上　柏子三合

終南山を立ち出でて赤切終南山を立ち出でて。野草の露を分け行けば遠村に煙満ち人寂まるき眺望の海

路遠かに過ぐれば釣の小舟も帰る浪。夜ほどもなき明かなる夜ほどもなきあかつきかな

シテ鍾馗河朗カニ呼掛なうあうあれある旅人にやすべき事のかな時サテ何事にてぞシテ閑カニわれ昔拙者の子細あるにより。悪鬼を亡し国土を安らんとの拙者あり。君賢

人となり給たぶ。宮中より現ず奇瑞をなすべきその子の事を奏して。たび給へ時サテこれは不思議の御事かなさてさて御身はいかなる人ぞシテ閑カニ今の何とか色むべき。われは鍾馗といへる進士あるが。及第のみぎんに亡ぜ。その執心を翻し。後世にあな

望(ノゾミ)あり（ワキカツテ）げにげに鐘堂の御事は。去に隠れなき進士なるが。その亡心(ボウシン)にてまゝますか（ワキ）なかなか（シテカ上上朗カニ拍子合ヨワク）なりと。夕暮(ユフグレ)の（ワキ）物すさまじき

○小謡

（シテ上中上上拍子）折からに。草虫露に聲しをれ。草虫露に聲しをれ。草老松既に風絶えて。草老松既に風絶えて。見へぐも松は

○独吟

答へず。げにや。何事も。思ひ絶えぬん色も香も。絶えは添はぬ花紅葉いつとなく。いつとなく。定めぬいつをかいつとさだめん。○生(クセ)の風の前の雲。夢の間に散り易く。三界の水の上の泡。光の前に消えんとす。綺羅殿の内にも有為の悲しみと。告げ。翡翠の

帳の内には有漏の願力あり、とかや。
栄華はそれ、まの花。昨日の盛んあれ
ども、今日は衰ふわんりきの秋の
光。朝に増ゝ夕べに減ずとか春去り
秋来つて。花散ず葉落つ時移り
氣色衰じて。楽み既に去つて悲び
早く来れり　シテ上朝顔の花のごとく

露よりもたかあき物のかげろふの。
あるかなきかの心地して。世を秋風
のわたり靡き。羣れゐるたづの音と
鳴きて去でのち田長の一聲も。誰が
よみぢとかゝらすらん。あたれあり
ける人界をいつかの部れたつべき。
これは不思議の御事かな。名つぎ

帝都に赴きつゝ委しく奏聞申
すべし。暫く待たせ給へとよ
シテ〽とても見えし夢の中。真の姿
を顕さんと〇云ふより早く　シテ〽気色
変りて〽伝へ聞く仏在世の伝へ
聞く仏在世の浄蔵浄眼の如くにて
その高さ七多羅樹。虚空にあがり

ては座せしめ地に入つては火焔を
放して。水を踏む事陸地の如く
ぱらさらさらと走り去つて。形はさ
ながら山彦の形はさながら山彦
の聲ばかりして失せにけり聲
ばかりして失せにけり〇中入語間
ワキ上テ　待謡〽苔の席にて法をのべ昔の席にて法を
〇切迫囃子

のべざもすさましき山陰の嵐と共に聲立て。この妙經を。讀誦するこの妙經を讀誦する

後シテ鍾馗上　早笛　拍子ニ合ハズ　手強ク確カリ

鬼神に横道なしといふに。何ぞみだりに騒がしく。妙ならずや我が心。國土を守る。誓ひあり

地　寶劒光すさましく。日月影おろそかに。松

嵐梢と拂ふが如く。悪鬼の亂れ落ち去つてげにも鍾馗の精靈たり

地上謠頭弁切　ロンギ上

有難の御事やそも君道を守らんの。その誓願の御誓ひいかなる謂あるらん

シテ上　鍾馗及第の。鍾馗及身のみぎりにて。われと亡ぜし悪心をと。翻す一念の発起菩提

○仕舞

心なるべし　げに真ある拵とて。
國土を鎮め分きてげに　榮裏
雲居の樓閣の　そやかそで遍
滿し　或は玉殿　廊下の下。
階のもとまでも。御階のもとまで
も。劔を潛めて忍び忍びにもと
もれべ葉のめぐ。見神の通力失せ。

顯れ出づれば忽にづだづだよ切り
放して。まのあたりある。その勢たぶ
ての劔の威光となつて。天に輝き
地に遍く。治まる國土となる事
治まる玉土となる事もげに有難
き拵カなげに有難き拵カな。

473
44

著作權所有
無斷轉載

大正九年三月貳拾日印刷
同　年三月廿五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋

京都市上京區二條通麩屋町東北角
發行兼印刷者　檜常之助

東京市神田區錦町一丁目拾番地
發行所　檜大瓜

東京市四谷區傳馬町貳丁目
印刷所　江川堂

終